タイトル

記憶―五条坂の手紙

作　津島次温

登場人物

直子（45歳）　大学教授。建築学専攻。

芙美（72歳）　直子の母

正春（88歳）　直子の大叔父

妙春（95歳）　尼僧

由香（39歳）　喜美子の孫

ＳＥ　五条通の喧騒。車の往来。

直子「うわあ、賑やかやなあ。ようやく人が
　戻ってきた感じやな。東大路五条。五条坂。
　焼き物、原田陶器店。到着。ホンマ、久し
　ぶりやな」

ＳＥ　店の玄関引き戸を開ける

直子「お邪魔しまーす」
芙美「いらっしゃいませ……あ、直子」
直子「お母さん、久しぶり」
芙美「この放蕩娘め、ようやく来たか」
直子「えらい言われようやな」
芙美「当たり前や。全然、顔出さへんし」
直子「仕方ないやん。学会とか調査とか、い
　ろいろあんねん」
芙美「京都に住んどるんやろ。たまには顔出
　しいな」
直子「電話はしとるやん」

芙美「まぁ、お父ちゃんとお母ちゃんのおかげやな。法事でも無かったら、私は娘の顔を見ることができひん」

直子「分かりました。ちゃんと顔を出すようにします」

正春「おお、直子、久しぶりやな」

直子「マア君、久しぶり」

正春「よう来たなあ。まあ、上がれ上がれ」

直子「いつもお母さんがお世話になってます」

正春「芙美ちゃんは高志兄ちゃんの一人娘や。ワシにとっても娘みたいなもんやさかいな。それに、世話になっとるんはワシの方やて。こんな八十過ぎの爺さんの話し相手やら、店番までしてもろうてなあ」

芙美「私は何にも。ここに住ませてもろうて有難いかぎりや」

正春「何言うとるんや。ここはあんたが生まれ育った実家やないか。原田陶器店はワシら家族が引き継ぐまでは高志兄ちゃんが切り盛りしてきた店や。遠慮のう暮らしたら

　ええねん」
直子「ほんま、ありがとう、マア君」
正春「まあ、直子、それより上がり。兄ちゃんと照子さんの仏壇、拝んだって」
直子「うん」

　　ＳＥ　仏壇のお鈴

直子「高志お祖父ちゃん、照子お祖母ちゃん、久しぶり」
芙美「直子、お茶入れたから飲もか」
直子「ありがとう」

　　お茶を飲む

直子「ようやく法事ができるな」
芙美「お母ちゃんの二十三回忌のときはコロナがえらいことになっとったからなあ。まあ、おかげでというか、こうやってお父ちゃんの十七回忌と併せてやることになって」

直子「それも良かったんちゃう。お祖父ちゃんとお祖母ちゃん、仲良かったしなあ。法事も一緒にしてあげるんがええんちゃう」

芙美「まあ、そうやな」

直子「ああ、でもホンマ懐かしいわ。お母さんの実家。子供の時、奥の座敷で照子お祖母ちゃんに絵本読んでもろうてたんや」

芙美「お母ちゃんはあんたのこと、えらい可愛がっとったもんなあ」

直子「優しい人やったな、お祖母ちゃんは」

芙美「ほんで直子、最近はどうなん」

直子「どうなんって、何が」

芙美「何がって、相変わらず仕事で飛び回ってばっかりなんかいな」

直子「うん。まあそうやな」

芙美「まったく、大学の先生はお忙しいな。あんたの研究、えー、建築史学やったっけ」

直子「うん」

芙美「そんなに面白いの」

直子「もちろん。せやなかったら十何年も続

けてへんて」
芙美「ふーん」
直子「今な、京町屋の研究してんねん。古い家がこの時代までずっと残ってきたワケを調べてな、それを現代建築の設計にも活かすの。そうやって昔の建物と今の建物をリンクさせられた時がな、楽しいねん」
芙美「ああ、そうか」
直子「何、興味ない」
芙美「うん。無い」
直子「やったら聞かんといてえな」
芙美「私があんたのことで興味あることはひとつだけや」
直子「はあ。はいはい」
芙美「ほんで、和也君とはどうなん」
直子「ああ、まあ、相変わらずやで」
芙美「相変わらずって、あんたなあ」
直子「気にせんでも、ちゃんと考えてるて」
芙美「あんた、よお考えてみいな。もう四十も半ばで、あんな風に言うて来てくれる人

は二度と」
直子「はいはい。分かってます」
芙美「ホンマにもう……直子、あんた、まだ」
直子「お母さん」
芙美「え」
直子「前から気になっとったんやけど、ここの台所の床下収納、めっちゃ大きいな」
芙美「床下？ああ、その床の扉のことか」
直子「うん」
芙美「それは収納とちゃう。防空壕や」
直子「防空？」
芙美「せや。戦争中に使こてたらしい」
直子「この家、そんなもんが有ったん。なあ、この中ってどんな風になってんの」
芙美「さあなあ。直子、話そらさんといて。あんた、もしかしてまだ」
直子「お母さん、私、これが気になる」
芙美「これて」
直子「防空壕。なあ、入ってみいひん」
芙美「ええ、そんなことよりあんたの」

直子「民家の軒下の防空壕なんか今まで見たことないいし」

芙美「やから何なの」

直子「興味湧くやろ」

芙美「湧きません」

直子「とりあえず入ってみよ」

芙美「ちょっと直子」

ＳＥ　床の扉を開く

直子「うわ、結構深いなあ。それにまあまあ広い。畳、三畳分くらいあるかな」

芙美「直子。まったく、何が面白いの」

直子「お母さんも、ここ初めて見るの？」

芙美「私が生まれたときにはもう戦争は終わってたしな」

直子「壁はブロックで固めてるんや。あれ？お母さん、見て。なんか小さい箱がある。何やろ、これ」

芙美「さあ、戦時中に非常食でも入れとった

んちゃうか。なあ直子、もうええやろ」

直子「よし。開けてみよ」

ＳＥ　小箱の引き出しを開ける

直子「お母さん、これ見て。手紙が入っとる」

芙美「手紙？」

直子「あ、奥にもう一通ある。それにこれ」

芙美「何？」

直子「ブローチ。陶器でできとる」

芙美「ブローチ？ヒナギクか、へえ、可愛らしいなあ」

直子「お母さん、この手紙見て」

芙美「えー。『高志さんへ』？」

直子「高志さんて、高志お祖父ちゃん」

芙美「そうやな。お祖父ちゃん宛ての手紙みたいやな」

直子「中、見てみよか」

芙美「うん」

直子「『高志さんへ。どうぞご無事で帰って

きてくださ い。 私も必ず五条坂へ帰ってき
ます。 はりまや橋で待っています。 どうぞ
ご無事で』。 なあ、 これ照子お祖母ちゃん
のラブレターちゃう」
芙美「ラブレター？」
直子「やって、 この文面『どうぞご無事で』
『はりまや橋で待ってます』て、 なんかロ
マンスを感じるやん」
芙美「ラブレターて。 その手紙、 送り主の名
前書いてないの」
直子「書いてない」
芙美「それ、 お母ちゃんが書いたんとちゃう
と思うで」
直子「何で？」
芙美「やって、 お母ちゃんもお父ちゃんも、
生まれたときからずうっとこの五条坂で暮
らしてるのに、『私も必ず五条坂へ帰って
きます』て。 それに、 はりまや橋て。 二人
で高知に行ったって、 聞いたことない」
直子「ほな、 これ、 誰が書いたん」

芙美「知らんがな」
直子「手紙だけちゃうで。ブローチまで一緒に仕舞うてある。これ、お祖父ちゃんがお祖母ちゃんにあげたもんちゃう」
芙美「でも。なあ、そのもう一通の手紙は何が書いてあるの」
直子「え、えーと。『さようなら』、それだけ。何、これ、どういうこと？」
芙美「さっぱり分からへんわ」
直子「この手紙、だいぶ古そうやな。マア君やったら、何か知ってるやろか」
芙美「かもしれんな」
直子「よし、マア君に聞いてみよ」
芙美「え、ちょっと直子」

正春「『高志さんへ』兄ちゃん宛ての手紙か」
直子「防空壕で見つけてん」
正春「防空壕て、台所の地下のか」
直子「マア君、この手紙、何か心当たりある」
正春「マア君って、直子にそない呼ばれ方す

るんは何や恥ずかしなってきたなあ」

直子「なんで、子供のときからそう呼んでるやん。マア叔父さんとかて呼んでほしいん。今さら変えられへんで」

正春「いや、ええねんで。ええねんけど、何かうれしいようなこそばゆいような、なあ」

直子「それよりマア君、この手紙」

正春「ああ、そうやったな。ええ、『高志さんへ。どうぞご無事で帰ってきてください』何やこれ。照子さんが兄ちゃんに書いたラブレターか」

芙美「私らも最初そう思うたんやけど。お母ちゃんが書いたもんやない気がするねん」

正春「『どうかご無事で』……はあ、これは兄ちゃんが出征してたときの手紙やろか」

直子「出征？戦争に行ってた時いうこと？」

正春「おお。高志兄ちゃんは学徒動員でフィリピンへ行っとったさかい」

直子「それやったら、やっぱりお祖母ちゃんのラブレターかなあ。戦地に居るお祖父ち

ゃんに書いた」
芙美「でも、はりまや橋って何。戦時中やったら高知旅行なんて尚更考えられへん」
正春「はりまや橋」
直子「ほら、『はりまや橋で待ってます』て」
正春「はりまや橋、はりまや橋、ああ」
直子「マア君、何か知ってんの？」
正春「(歌う) 土佐の高知のはりまや橋で坊さんかんざし買うを見た～」
直子「びっくりするなあ。何、その歌」
正春「知っとるやろ。高知のよさこい節やん」
直子「急に歌いだすんやもん」
正春「高志兄ちゃんが歌うとった。思い出したわ。あれは、戦争中やったなあ。ワシがまだ小学校上がりたての頃やったさかい。ああ、あの頃は国民学校て言うてたなあ」
芙美「お父ちゃんが、よさこい節を歌うとったん」
正春「ああ、そうや。音羽川の側を一緒に歩いとるときに歌うとった」

直子「音羽川？」

正春「今はもう無いけどな。五条通の南っかわを流れとった小さい川や。ほれ清水寺に音羽の滝てあるやろ。あそこから流れて来とったさかい音羽川」

直子「そんな川が有ったんや」

正春「五条通の南っかわは、建物疎開で家がのおなって、戦争の前とは様子が変わったさかいなあ」

直子「建物疎開があったん」

正春「ああ。この家の前に歩道があるやろ。戦争の前の五条通いうたらあの歩道や。今、車が走っとる大きい通りの辺りは家がずらっと並んどった。焼き物の卸の店やら、焼き物師の家やらなあ。賑やかな町やった」

直子「そのころに、その音羽川が在ったん」

正春「ああ、在った」

芙美「そこに、はりまや橋いう橋が在ったん？」

正春「さあ。ワシはそんな橋は知らん。せや

けど、高志兄ちゃんが言うとった。はりまや橋はここに在るんやて」
芙美「音羽川に？」
正春「ああ。確かにそう言うとったなあ」
直子「マア君、このブローチは」
正春「ブローチ？」
直子「このブローチには見覚え無い？」
正春「古いもんやな。陶器でできとるんか。いやあ、見たことないなあ」
直子「そうか」
芙美「はりまや橋。音羽川。お父ちゃんはどこのことを言うとったんやろ」
直子「終戦前のこの辺りの様子が分かったら、何かヒントがつかめそうやな」
芙美「そんなん分かるん」
直子「ふふふ、私は建築学のプロやで。任せといて、資料探してくるから」

M